

フェミニズムと公共空間

元研究員 神谷 佐菜

一昨年8月にスペインを退所し、バルセロナ大学の大学院で都市デザインを学び始め、一年半が経とうとしている。バルセロナに来てから、独立運動、移民問題、公共空間における環境心理学など多くのことを学んできた。



大学中庭での都市再生の授業の様子



サン・アントニ地区のタクティカルアーバニズム



女性に対する暴力撤廃デー（11/25）のPR広告

タクティカルアーバニズムとフェミニズム

ある日、国鉄のRENFEに乗っている座席に「フェミニズム(※)」と「独立」と落書きされていた。駅から出るとまた同じフレーズが書かれた幕が壁に吊されており、大学のトイレにも「男に敷かれるな、雌犬」トイレを出ると「フェミニサイド(※)マップ」が掲げられている。学生が作ったフェミニサイドマップは、被害者数を不気味な人形の数で示しており、何度見ても心痛むものだ。

バルセロナの女性市長アダ・コラウ氏は、タクティカルアーバニズムを推進している。これは、公共(的)空間を簡単な施術で歩行空間にすることだ。日本でも行われているパーキングゲイなども当てはまる。バルセロナでは道路の一部をベンキでマーキングし、そこにベンチやテーブル、プランターを置いて広場としている。本来の広場や公園、または歩道拡張を従来のやり方より安くできる。タクティカルアーバニズムとフェミニズムの関係は男女平等な公共空間を考える事と同じだ。例えば、車道と都市計画は男性の象徴である。車の歴史から見てそれは明らかだ。現在の都市は誰が計画したのか。ほとんどが男性であろう。地下横断歩道は男性にとっては怖くないが女性が一人で歩いているときに男性が複数人来たら怖いし、それこそ不平等なデザインと言える。自転車道を設置するのも、

広場や公園を増やすことも、車道の面積が減ることになり、ある意味で男女平等な空間になるのだ。バルセロナでは床のタイルのデザインでさえ、ヒールを使う女性に優しくなければ、マチズム(※)だと批判されることもある。タクティカルアーバニズムは男女平等な空間を増やす一つの手段だ。

ただバルセロナでは、その早急で半ば強引ともいえる事業実施に近隣住民からは批判もある。また、急に変わった交通ルールで実際に事故も起きている。完璧な空間づくりにはまだ課題が残る。

スペインのコロナ事情

スペインのコロナ規制は日々追うのが大変だ。やっと飲食店での飲食が許されると思っていたら、いつのまにか延長されていたり、週末のみ市境を超えることを規制されたり、毎日ニュースを確認しなければ、うっかり罰金なんてこともあり得る。そのためネットで申請できる外出許可証を印刷し持ち歩いている。飲食店は、規則違反で営業停止になるため、店内やテラスで飲食している人は見かけないが、パトカーが入りにくい裏路地や広場に面している飲食店は、人だかりが目立つほど歩いていたりする。バーの入り口で近隣の人々が集まってビールを飲み、広場のベンチや階段、芝生に座って、テイクアウトで買った食べ物を食べながら、友人、同僚とおしゃべりしている。公

的・私的を問わず、六人以上で集まることは禁じられている為、学校によっては工夫しながら、公共空間で授業を行ったりするところもある。人々はコロナで規制された活動の場を公共空間で賑わうことで補っているように見える。

私のこれからの挑戦

私は、「社会に出る」＝「企業に就職する」という通念に疑問を持っている。「Twitterでこんな吹きを見かけた。彼女は、大学卒業後、アルバイトで貯めたお金でスペインの語学学校へ進学。一年間スペインで働きながら勉強し、帰国後ある化粧品会社に就職した。彼女はそこで、上司に「社会に出たことのない子だから」と同僚に紹介された。「社会に出る」とは、生きていくために働き、その過程で社会に関わっていくことではなく、自分の責任で何かをすること、社会人であることの誇りであり、それが大人だということではないのか。

私は今、大学院に通いながら自営業で働いている。生きる為に自分で考え行動している。スペインは、やっと金融危機から回復してきたところでコロナショックに見舞われている。例の上司の言うところの「社会人」になれる学生は少ないだろう。それでも生きる為に、やりたい事の為に責任を持って働いているのであれば立派だと思う。私はこれから、生きる為、やりたいことの為、様々なことに挑戦し続けるつもりだ。

※フェミニズム：女性も男性と同等の権利があるという考え

※フェミニサイド：女性または少女であるが故に殺害されること

※マチズム：男性中心主義